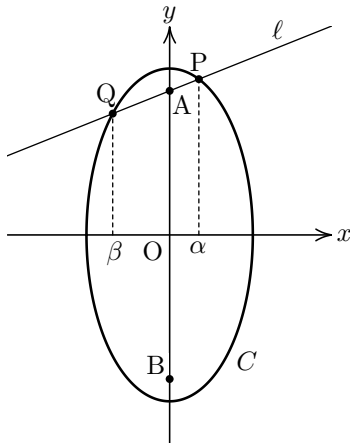


B 1

座標平面上に楕円 $C : x^2 + \frac{y^2}{4} = 1$ と 2 点 $A(0, \sqrt{3}), B(0, -\sqrt{3})$ がある. $m > 0$ とし, 点 A を通る傾き m の直線 ℓ とする. 楕円 C と直線 ℓ との二つの交点を P, Q とし, 2 点 P, Q の x 座標をそれぞれ α, β ($\alpha > \beta$) とする.

- (1) $\alpha + \beta$ と $\alpha\beta$ をそれぞれ m を用いて表せ.
- (2) 線分 PQ の長さを m を用いて表せ.
- (3) 線分 BP と線分 BQ の長さの和が 5 であるとき, 線分 PQ の長さを求めよ. また, そのときの m の値を求めよ.
- (4) m が (3) で求めた値であるとき, $\triangle BPQ$ の面積を求めよ. 【2026 広島大学】

解説 A, B は楕円 C の焦点である.



- (1) P, Q は $\ell : y = mx + \sqrt{3}$ と C との共有点であるから, その x 座標である α, β は

$$x^2 + \frac{(mx + \sqrt{3})^2}{4} = 1$$

すなわち

$$(m^2 + 4)x^2 + 2\sqrt{3}mx - 1 = 0$$

の 2 解である. ゆえに, 解と係数の関係から,

$$\alpha + \beta = -\frac{2\sqrt{3}m}{m^2 + 4}, \quad \alpha\beta = \frac{-1}{m^2 + 4}.$$

- (2)

$$PQ = \sqrt{1^2 + m^2}(\alpha - \beta)$$

に注意する. ここで,

$$\begin{aligned} (\alpha - \beta)^2 &= \alpha^2 - 2\alpha\beta + \beta^2 \\ &= (\alpha + \beta)^2 - 4\alpha\beta \end{aligned}$$

であることから, (1) により,

$$\begin{aligned} (\alpha - \beta)^2 &= \left(-\frac{2\sqrt{3}m}{m^2 + 4}\right)^2 - 4 \cdot \left(\frac{-1}{m^2 + 4}\right) \\ &= \frac{12m^2 + 4(m^2 + 4)}{(m^2 + 4)^2} \\ &= \frac{16(m^2 + 1)}{(m^2 + 4)^2} \end{aligned}$$

とわかるので,

$$\alpha - \beta = \frac{4\sqrt{m^2 + 1}}{m^2 + 4}.$$

$$\therefore PQ = \frac{4(m^2 + 1)}{m^2 + 4}.$$

- (3) P, Q は楕円 C 上の点であるから,

$$AP + BP = (\text{長軸の長さ}) = 2 \times 2 = 4,$$

$$AQ + BQ = (\text{長軸の長さ}) = 2 \times 2 = 4$$

を満たすので, 三角形 BPQ の周の長さは

$$BP + \underbrace{PA + AQ}_{PQ} + QB = 8$$

である. したがって, $BP + BQ = 5$ となる条件は,

$$PQ = 8 - 5 = 3$$

であり,

$$\frac{4(m^2 + 1)}{m^2 + 4} = 3$$

より,

$$m = 2\sqrt{2}.$$

- (4) $m = 2\sqrt{2}$ のとき, $\alpha - \beta = 1$ であり,

$$\triangle BPQ = \triangle QAB + \triangle PAB$$

$$= \frac{1}{2} \cdot AB \cdot (\alpha - \beta)$$

$$= \frac{1}{2} \cdot 2\sqrt{3} \cdot 1 = \sqrt{3}.$$

B 2

- (1) 関数 $f(x) = \frac{1}{\sqrt{1-x^2}}$ ($-1 < x < 1$) の導関数を求めよ.

- (2) $0 \leq x \leq \frac{1}{2}$ において, 不等式 $\frac{1}{\sqrt{1-x^2}} \geq 1 + \frac{x^2}{2}$ が成り立つことを示せ.

- (3) 定積分 $\int_0^{\frac{1}{2}} \frac{dx}{\sqrt{1-x^2}}$ の値を求めよ.

- (4) 円周率 π についての不等式 $\pi > 3.125$ を示せ.

【2026 青山学院大学】

解説 $f(x) = (1-x^2)^{-\frac{1}{2}}$ ($-1 < x < 1$).

(1)

$$f'(x) = -\frac{1}{2}(1-x^2)^{-\frac{3}{2}} \cdot (-2x) = x(1-x^2)^{-\frac{3}{2}} = \frac{x}{(\sqrt{1-x^2})^3}$$

(2) $g(x) = f(x) - \left(1 + \frac{x^2}{2}\right)$ とおくと,

$$\begin{aligned} g'(x) &= f'(x) - x \\ &= \frac{x}{(\sqrt{1-x^2})^3} - x \\ &= x \left\{ \frac{1}{(\sqrt{1-x^2})^3} - 1 \right\} \\ &= x \cdot \frac{1 - (\sqrt{1-x^2})^3}{(\sqrt{1-x^2})^3} \end{aligned}$$

$0 < x < \frac{1}{2}$ において $g'(x) > 0$ であるから, $0 \leq x \leq \frac{1}{2}$ で $g(x)$ は単調増加. さらに, $g(0) = 0$ であるから, $0 \leq x \leq \frac{1}{2}$ において $g(x) \geq 0$ すなわち $f(x) \geq 1 + \frac{x^2}{2}$ であることが示された. (証明終り)

(3) $x = \sin \theta \left(-\frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}\right)$ とおく置換積分を実行すると,

$$\sqrt{1-x^2} = \sqrt{\cos^2 \theta} = |\cos \theta|, \quad dx = \cos \theta d\theta,$$

$x: 0 \rightarrow \frac{1}{2}$ のとき, $\theta: 0 \rightarrow \frac{\pi}{6}$ であるから,

$$\int_0^{\frac{1}{2}} \frac{dx}{\sqrt{1-x^2}} = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{\cos \theta}{|\cos \theta|} d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{6}} d\theta = \frac{\pi}{6}$$

(4) (2) で示した不等式での等号成立は $x = 0$ のときのみであるから,

$$\int_0^{\frac{1}{2}} g(x) dx > 0$$

すなわち

$$\int_0^{\frac{1}{2}} f(x) dx > \int_0^{\frac{1}{2}} \left(1 + \frac{x^2}{2}\right) dx$$

が成り立つ. ここで,

$$\int_0^{\frac{1}{2}} \left(1 + \frac{x^2}{2}\right) dx = \left[x + \frac{x^3}{6}\right]_0^{\frac{1}{2}} = \frac{25}{48}$$

であり, これと (3) により,

$$\frac{\pi}{6} > \frac{25}{48}$$

の成立がわかる. これより,

$$\pi > \frac{25}{8} = 3.125$$

が成り立つ.

(証明終り)

注意 (2) は本質的には, 「 $0 \leq X \leq \frac{1}{4}$ において, 不等式 $\frac{1}{\sqrt{1-X}} \geq 1 + \frac{X}{2}$ を示せ」という問題である. (2) の問題単独であれば, x の関数ではなく $x^2 = X$ の関数と捉える方が自然であるが, (3), (4) への繋がりを考えると「2乗」の意図がわかるであろう.

参考 本問の背景には $\frac{1}{\sqrt{1-x^2}} = (1-x^2)^{-\frac{1}{2}}$ のテイラー展開

$$\frac{1}{\sqrt{1-x^2}} = 1 + \frac{1}{2}x^2 + \frac{3}{8}x^4 + \dots$$

がある. x^4 の項まで含めて考えると本問の結果は次のように, より良い π の評価を与える. (2) に対応する主張として, $0 < x \leq \frac{1}{2}$ において,

$$\frac{1}{\sqrt{1-x^2}} > 1 + \frac{1}{2}x^2 + \frac{3}{8}x^4$$

が成り立つ. すると, (4) に対応する主張は,

$$\pi > 6 \left[x + \frac{x^3}{6} + \frac{3}{40}x^5 \right]_0^{\frac{1}{2}} = 6 \times \frac{2009}{3840} = \frac{2009}{640} \approx 3.1390625$$

となる.

B 3

$$\alpha = \cos \frac{2\pi}{11} + i \sin \frac{2\pi}{11}, \quad \beta = \cos \frac{2\pi}{11} - i \sin \frac{2\pi}{11}$$

とし,

$$A = \alpha + \alpha^3 + \alpha^4 + \alpha^5 + \alpha^9, \quad B = \beta + \beta^3 + \beta^4 + \beta^5 + \beta^9$$

とおく. ただし, i は虚数単位とする.

- (1) $\alpha^{11} + \beta^{11}$ と $\alpha^2 - \beta^9$ の値をそれぞれ求めよ.
- (2) $A + B$ の値を求めよ.
- (3) AB の値を求めよ.
- (4) $A - B$ の値を求めよ. 【2026 新潟大学】

解説 $|\alpha| = |\beta| = 1$ であり, $\beta = \bar{\alpha} = \frac{1}{\alpha}$ である. ド・モアブルの定理により, $\alpha^{11} = 1$ であり, $\beta^{11} = 1$. また, 当然 $\alpha \neq 1$ である.

(1)

$$\alpha^{11} + \beta^{11} = 1 + 1 = 2.$$

$$\alpha^2 - \beta^9 = \alpha^2 - \frac{1}{\alpha^9} = \frac{\alpha^{11} - 1}{\alpha^9} = \frac{1 - 1}{\alpha^9} = 0.$$

(2) (1) より, $\alpha^2 = \beta^9$ とわかり, 同様に,

$$\beta^1 = \alpha^{10}, \quad \beta^3 = \alpha^8, \quad \beta^4 = \alpha^7, \quad \beta^5 = \alpha^6$$

である. これより,

$$B = \beta + \beta^3 + \beta^4 + \beta^5 + \beta^9$$

$$= \alpha^{10} + \alpha^8 + \alpha^7 + \alpha^6 + \alpha^2$$

であるから、

$$A + B = \sum_{k=1}^{10} \alpha^k$$

$$= \frac{\alpha(1 - \alpha^{10})}{1 - \alpha} = \frac{\alpha - \alpha^{11}}{1 - \alpha}$$

$$= \frac{\alpha - 1}{1 - \alpha} = -1.$$

(3) $\alpha\beta = 1$ に注意すると、 AB の展開は次の表のようになる。

\times	α	α^3	α^4	α^5	α^9
β	1	α^2	α^3	α^4	α^8
β^3	β^2	1	α	α^2	α^6
β^4	β^3	β	1	α	α^5
β^5	β^4	β^2	β	1	α^4
β^9	β^8	β^6	β^5	β^4	1

さらに、

$$i + j = 11 \implies \beta^i = \alpha^j$$

に注意して、 α のみで書き換えると次のようになる。

\times	α	α^3	α^4	α^5	α^9
β	1	α^2	α^3	α^4	α^8
β^3	α^9	1	α	α^2	α^6
β^4	α^8	α^{10}	1	α	α^5
β^5	α^7	α^9	α^{10}	1	α^4
β^9	α^3	α^5	α^6	α^7	1

これより、

$$AB = 5 + 2(A + B) = 5 + 2 \cdot (-1) = 3.$$

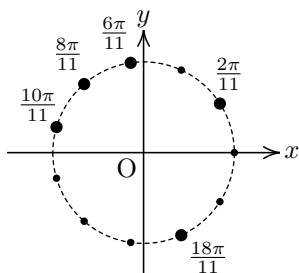
(4) $A + B = -1$, $AB = 3$ であるから、

$$(A - B)^2 = (A + B)^2 - 4AB = -11.$$

ここで、 $A - B$ の虚部は、

$$2 \left(\sin \frac{2\pi}{11} + \sin \frac{6\pi}{11} + \sin \frac{8\pi}{11} + \sin \frac{10\pi}{11} + \sin \frac{18\pi}{11} \right)$$

である。



$$\sin \frac{2\pi}{11} > 0, \quad \sin \frac{8\pi}{11} > 0, \quad \sin \frac{10\pi}{11} > 0$$

であり、

$$\sin \frac{6\pi}{11} + \sin \frac{18\pi}{11} = \sin \frac{5\pi}{11} - \sin \frac{4\pi}{11}.$$

ここで、

$$0 < \frac{4\pi}{11} < \frac{5\pi}{11} < \frac{5.5\pi}{11} = \frac{1}{2}\pi$$

であるから、

$$\sin \frac{4\pi}{11} < \sin \frac{5\pi}{11}$$

ゆえ、

$$\sin \frac{5\pi}{11} - \sin \frac{4\pi}{11} > 0.$$

よって、 $A - B$ の虚部は正である (図形的に明らか).

以上により、 $A - B$ は $(A - B)^2 = -11$ を満たす虚部が正の複素数であることから、

$$A - B = \sqrt{11}i.$$

参考 本問には「ガウス和」と呼ばれる数学的構造が背景にある。(2), (4) より、

$$A = \frac{-1 + \sqrt{11}i}{2}, \quad B = \frac{-1 - \sqrt{11}i}{2}$$

であることがわかる。

B 4

e を自然対数の底とする. $x > 0$ の範囲で指数関数 $y = e^x$ と多項式関数 $y = x^n$ (n は自然数) を比較する.

- (1) 自然数 n に対し、関数 $y = \frac{e^x}{x^n}$ ($x > 0$) の最小値 a_n とそのときの x の値を求めよ. また、 $y = \frac{e^x}{x^n}$ のグラフが下に凸であることを示せ.
- (2) 正の定数 a に対し、 $x > 0$ の範囲での関数 $y = e^x$ のグラフと関数 $y = ax^n$ のグラフの共有点の個数を求めよ.
- (3) (1) で求めた a_n を用いて $f_n(x) = \frac{e^x}{a_n x^n}$ とおき、 $f_n(x) = f_{n+1}(x)$ を満たす x を x_n とする. x_n を求めよ.
- (4) (3) で求めた x_n に対して $n < x_n < n+1$ を示し、さらに不等式 $\left(1 + \frac{1}{n}\right)^n < e < \left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n+1}$ を証明せよ. 【2026 中央大学】

解説 $g(x) = \frac{e^x}{x^n}$ とおく.

(1)

$$g'(x) = \frac{e^x \cdot x^n - e^x \cdot nx^{n-1}}{(x^n)^2} = \frac{e^x x^{n-1}(x-n)}{x^{2n}} = \frac{e^x(x-n)}{x^{n+1}}$$

x	(0)	\cdots	n	\cdots
$f'(x)$		$-$	0	$+$
$f(x)$		\searrow	$\frac{e^n}{n^n}$	\nearrow

これより、 $g(x)$ は

$$x = n$$

のときに最小値

$$a_n = g(n) = \frac{e^n}{n^n}$$

をとる。さらに、

$$g''(x) = \frac{e^x(x-n+1) \cdot x^{n+1} - e^x(x-n) \cdot (n+1)x^n}{(x^{n+1})^2} = \frac{x^n e^x \{(x-n+1) \cdot x - (x-n)(n+1)\}}{x^{2n+2}} = \frac{e^x \{x^2 - 2nx + n^2 + n\}}{x^{n+2}} = \frac{e^x \{(x-n)^2 + n\}}{x^{n+2}}$$

より、 $x > 0$ において $g''(x) > 0$ であるから、 $y = g(x)$ のグラフは下に凸である。(証明終り)

(2) $x > 0$ において

$$e^x = ax^n \iff \frac{e^x}{x^n} = a$$

であるから、 $y = e^x$ ($x > 0$) と $y = ax^n$ ($x > 0$) の共有点は曲線 $y = g(x)$ ($x > 0$) と直線 $y = a$ との共有点の個数と一致する。

$$\lim_{x \rightarrow +0} g(x) = \infty, \quad \lim_{x \rightarrow \infty} g(x) = \infty$$

および (1) での $g(x)$ の増減の解析により、求める個数は

a	\cdots	$\frac{e^n}{n^n}$	\cdots
個数	0	1	2

(3) $f_n(x) = \frac{n^n e^x}{e^n x^n}$ より、 $x > 0$ において、

$$f_n(x) = f_{n+1}(x) \iff \frac{n^n e^x}{e^n x^n} = \frac{(n+1)^{n+1} e^x}{e^{n+1} x^{n+1}} \iff x = \frac{(n+1)^{n+1}}{en^n}$$

であるから、

$$x_n = \frac{(n+1)^{n+1}}{en^n}$$

(4) $n < x_n < n+1$ すなわち

$$n < \frac{(n+1)^{n+1}}{en^n} < n+1 \quad \cdots (*)$$

が成り立つことを証明しよう。

$$(*) \iff \log n < \log \frac{(n+1)^{n+1}}{en^n} < \log(n+1)$$

であり、

$$\log \frac{(n+1)^{n+1}}{en^n} = (n+1) \log(n+1) - n \log n - 1$$

であるから、

$$(*) \iff \frac{1}{n+1} < \log(n+1) - \log n < \frac{1}{n}$$

ここで、

$$\log(n+1) - \log n = \int_n^{n+1} \frac{1}{x} dx$$

であることに着目すると、 $y = \frac{1}{x}$ が $x > 0$ で単調減少であることから、

$$\int_n^{n+1} \frac{1}{n} dx > \int_n^{n+1} \frac{1}{x} dx > \int_n^{n+1} \frac{1}{n+1} dx$$

すなわち

$$\frac{1}{n+1} < \int_n^{n+1} \frac{1}{x} dx < \frac{1}{n}$$

の成立がわかる。これより、(*) の成立が確認できた。

(証明終り)

(*) より、

$$\frac{1}{n+1} < \frac{en^n}{(n+1)^{n+1}} < \frac{1}{n}$$

$$\frac{(n+1)^n}{n^n} < e < \frac{(n+1)^{n+1}}{n^{n+1}}$$

$$\left(\frac{n+1}{n}\right)^n < e < \left(\frac{n+1}{n}\right)^{n+1}$$

これより、不等式

$$\left(1 + \frac{1}{n}\right)^n < e < \left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n+1}$$

の成立がわかる。

(証明終り)

参考 (4) の不等式は本編の p.97 で紹介したものである。

B 5

n を 0 以上の整数とする. 区間 $1 \leq x \leq \pi$ で定義

された関数 $f_n(x) = \frac{\sin \frac{2n+1}{2}x}{2 \sin \frac{x}{2}}$ および定積分

$I_n = \int_1^\pi f_n(x) dx$ について, 以下の問いに答えよ.

- (1) 正の整数 k に対して $f_k(x) - f_{k-1}(x)$ を計算せよ.
- (2) 正の整数 n に対して $\sum_{k=1}^n \frac{\sin k}{k}$ を I_n を用いて表せ.
- (3) 極限 $\lim_{n \rightarrow \infty} I_n$ を求めよ.
- (4) 無限級数 $\sum_{k=1}^\infty \frac{\sin k}{k}$ の和を求めよ.

【2026 名古屋市立大学】

解説

(1) $k = 1, 2, 3, \dots$ に対して

$$\begin{aligned} f_k(x) - f_{k-1}(x) &= \frac{\sin \frac{2k+1}{2}x - \sin \frac{2(k-1)+1}{2}x}{2 \sin \frac{x}{2}} \\ &= \frac{\sin \left(kx + \frac{x}{2}\right) - \sin \left(kx - \frac{x}{2}\right)}{2 \sin \frac{x}{2}}. \end{aligned}$$

ここで, 和積公式により,

$$\sin \left(kx + \frac{x}{2}\right) - \sin \left(kx - \frac{x}{2}\right) = 2 \cos kx \sin \frac{x}{2}$$

であるから,

$$f_k(x) - f_{k-1}(x) = \frac{2 \cos kx \sin \frac{x}{2}}{2 \sin \frac{x}{2}} = \cos kx.$$

(2) (1) より, 正の整数 n に対して,

$$\begin{aligned} f_n(x) &= f_0(x) + \sum_{k=1}^n \{f_k(x) - f_{k-1}(x)\} \\ &= \frac{1}{2} + \sum_{k=1}^n \cos kx. \end{aligned}$$

これより,

$$\begin{aligned} I_n &= \int_1^\pi \left(\frac{1}{2} + \sum_{k=1}^n \cos kx \right) dx \\ &= \frac{\pi-1}{2} + \sum_{k=1}^n \left[\frac{\sin kx}{k} \right]_1^\pi \\ &= \frac{\pi-1}{2} - \sum_{k=1}^n \frac{\sin k}{k} \end{aligned}$$

であるから,

$$\sum_{k=1}^n \frac{\sin k}{k} = \frac{\pi-1}{2} - I_n.$$

(3) 部分積分により,

$$\begin{aligned} I_n &= \frac{1}{2} \int_1^\pi \sin \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cdot \frac{1}{\sin \frac{x}{2}} dx \\ &= \frac{1}{2} \left\{ \left[\frac{-\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right)}{n + \frac{1}{2}} \cdot \frac{1}{\sin \frac{x}{2}} \right]_1^\pi - \int_1^\pi \frac{-\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right)}{n + \frac{1}{2}} \cdot \frac{-\frac{1}{2} \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} dx \right\} \\ &= \frac{\cos \left(n + \frac{1}{2}\right)}{(2n+1) \sin \frac{1}{2}} + \frac{1}{2n+1} \int_1^\pi \frac{\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} dx. \end{aligned}$$

まず, $\frac{\cos \left(n + \frac{1}{2}\right)}{(2n+1) \sin \frac{1}{2}}$ について, $M = \frac{1}{\sin \frac{1}{2}}$ とおくと,

$$0 \leq \left| \frac{\cos \left(n + \frac{1}{2}\right)}{(2n+1) \sin \frac{1}{2}} \right| \leq \frac{1}{2n+1} \cdot M$$

がすべての自然数 n で成り立ち,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{1}{2n+1} \cdot M \right) = 0 \cdot \frac{1}{\sin \frac{1}{2}} = 0$$

であるので, はさみうちの原理から,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left| \frac{\cos \left(n + \frac{1}{2}\right)}{(2n+1) \sin \frac{1}{2}} \right| = 0.$$

$$\therefore \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{\cos \left(n + \frac{1}{2}\right)}{(2n+1) \sin \frac{1}{2}} = 0.$$

次に, $L = M^2$ とおくと, $1 \leq x \leq \pi$ において,

$$-L \leq \frac{\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} \leq L$$

が成り立つので,

$$-L(\pi-1) \leq \int_1^\pi \frac{\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} dx \leq L(\pi-1)$$

より,

$$-\frac{L(\pi-1)}{2n+1} \leq \frac{1}{2n+1} \int_1^\pi \frac{\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} dx \leq \frac{L(\pi-1)}{2n+1}.$$

ここで,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(-\frac{L(\pi-1)}{2n+1} \right) = 0 = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{L(\pi-1)}{2n+1}$$

であるので, はさみうちの原理から,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{2n+1} \int_1^\pi \frac{\cos \left(nx + \frac{x}{2}\right) \cos \frac{x}{2}}{\sin^2 \frac{x}{2}} dx = 0.$$

これより,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} I_n = 0 + 0 = 0.$$

(4) (2), (3) により,

$$\sum_{k=1}^{\infty} \frac{\sin k}{k} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \frac{\sin k}{k} = \frac{\pi - 1}{2} - 0 = \frac{\pi - 1}{2}.$$

参考 リーマン・ルベグの定理と呼ばれる定理がある.

— Theorem (Riemann - Lebesgue) —

$f(x)$ が $[a, b]$ で微分可能で $f'(x)$ が連続のとき,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_a^b f(x) \sin nx \, dx = 0.$$

リーマン・ルベグの定理の意味 $\sin nx$ は周期 $\frac{2\pi}{n}$ の周期関数で, 1 周期の間での積分は 0 である. n が大きくなると, $\sin nx$ の 1 周期の間では, 連続関数 $f(x)$ の値はほとんど変化しないから, 1 周期の間の $f(x) \sin nx$ の積分はほとんど 0 になるであろう. 言い換えれば, n が大きくなると $\sin nx$ の激しい振動による打ち消し合いの結果, 積分値が 0 に近づくと予想される. この予想は $f'(x)$ が連続という仮定のもとでは, 以下のように部分積分によって確かめられる. リーマン・ルベグの定理は $f(x)$ が連続という仮定だけで成り立つが, その証明は簡単ではない.

リーマン・ルベグの定理の証明 部分積分により,

$$\int_a^b f(x) \sin nx \, dx = -\frac{1}{n} \left[f(x) \cos nx \right]_a^b + \frac{1}{n} \int_a^b f'(x) \cos nx \, dx. \quad \dots (*)$$

さて, $|f(x)|, |f'(x)|$ は閉区間 $[a, b]$ で連続だから, $[a, b]$ で最大値をとる. いま, $|f(x)| \leq M, |f'(x)| \leq M'$ としよう. このとき, (*) の右辺の第 1 項の絶対値は $\frac{2M}{n}$ を超えないから, 第 1 項は $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束する.

次に, (*) 右辺の第 2 項の積分について,

$$\left| \int_a^b f'(x) \cos nx \, dx \right| \leq \int_a^b |f'(x) \cos nx| \, dx \leq M'(b-a)$$

が成り立つから, 第 2 項も $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束する. ■

上の (3) での証明はこの Riemann - Lebesgue の定理の証明を真似たものである.

Coffee Break n 個の正の実数 x_1, \dots, x_n の

$$\text{相加平均 } A_n = \frac{x_1 + \dots + x_n}{n}$$

と

$$\text{相乗平均 } G_n = \sqrt[n]{x_1 \cdots x_n}$$

の間には, 大小関係

$$A_n \leq G_n \quad \dots P(n)$$

が成り立つ. なお, 等号成立は $x_1 = \dots = x_n$ の場合に限る.

ここでは, $P(2)$ を用いて $P(4)$ を証明し, $P(4)$ を用いて $P(3)$ を証明してみたい.

$P(2) \rightarrow P(4)$ の証明 $\frac{a+b}{2} \geq \sqrt{ab}$ に対し,

$$a = \frac{x_1 + x_2}{2}, \quad b = \frac{x_3 + x_4}{2}$$

として,

$$\frac{\frac{x_1 + x_2}{2} + \frac{x_3 + x_4}{2}}{2} \geq \sqrt{\frac{x_1 + x_2}{2} \cdot \frac{x_3 + x_4}{2}} \quad \dots \textcircled{1}$$

が成り立つ. ① での等号成立は

$$x_1 + x_2 = x_3 + x_4 \quad \dots \textcircled{1}'$$

のときに限る. さらに,

$$\frac{x_1 + x_2}{2} \geq \sqrt{x_1 x_2}, \quad \frac{x_3 + x_4}{2} \geq \sqrt{x_3 x_4}$$

であるので,

$$\sqrt{\frac{x_1 + x_2}{2} \cdot \frac{x_3 + x_4}{2}} \geq \sqrt{\sqrt{x_1 x_2} \cdot \sqrt{x_3 x_4}} \quad \dots \textcircled{2}$$

② での等号成立は

$$x_1 = x_2, \quad x_3 = x_4 \quad \dots \textcircled{2}'$$

のときに限る. ①, ② により,

$$\frac{x_1 + x_2 + x_3 + x_4}{4} \geq \sqrt[4]{x_1 x_2 x_3 x_4}$$

の成立がいえ, 等号成立は, ①' かつ ②' の場合, すなわち, $x_1 = x_2 = x_3 = x_4$ の場合に限ることがわかる. ■

$P(4) \rightarrow P(3)$ の証明 $\frac{a+b+c+d}{4} \geq \sqrt[4]{abcd}$ に対し,

$$a = x_1, \quad b = x_2, \quad c = x_3, \quad d = \sqrt[3]{x_1 x_2 x_3}$$

として,

$$\frac{x_1 + x_2 + x_3 + \sqrt[3]{x_1 x_2 x_3}}{4} \geq \sqrt[4]{x_1 x_2 x_3 \sqrt[3]{x_1 x_2 x_3}}$$

すなわち

$$\frac{x_1 + x_2 + x_3}{3} \geq \sqrt[3]{x_1 x_2 x_3}$$

が成り立つ. 等号成立は,

$$x_1 = x_2 = x_3 = \sqrt[3]{x_1 x_2 x_3}$$

すなわち, $x_1 = x_2 = x_3$ のときに限り成り立つ. ■